

小学校生活科と幼児教育とのつながり — 接続期カリキュラムの検討をとおして —

松崎 洋子・無藤 隆

1. 問題

(1) 小学校教育と幼児教育の違い

文部科学省が設置した「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」は、2010年11月に報告書「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」を発表した。その中で、「幼児期の教育と児童期の教育は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われることは極めて重要である。」としている。会議では、幼児期と児童期の教育の連続性・一貫性が強調され、幼児期と児童期の教育を発達段階に配慮した違いとしてとらえようとしている（酒井・横井、2011）。

小学校と幼稚園・保育所等の就学前施設は、「チャイムによる生活時程への変化」「担任とのかわり方の違い」「学校のきまり/ルールの違い」など多くの違いがある（和田ら、2013）。小学校入学後は、これらの新しい出来事や習慣に出会い、その中で生活することが必要となるため、期待と同時に戸惑いを感じ、スムーズに適應することが難しい児童が出現している。

(2) 接続期の教育と生活科教育

そのため、子どもたちがスムーズに学校生活に適應できるように、最近では就学前から小学校入学後を「接続期」ととらえ、接続期の教育に取り組むようになってきた。就学前教育にはアプローチカリキュラム、小学校入学直後にはスタートカリ

キュラムを作成し、教師や保育者は小学校と幼児教育との違いを意識して教育する。

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」報告書（文部科学省、2010）では、連携から接続へと発展する過程を「連携の予定・計画がまだ無い（ステップ0）」から、「接続を見通して編成・実施された教育課程について、実践結果を踏まえ、更によりよいものとなるよう検討が行われている（ステップ4）」の5段階に分けた。

小学校において、主に接続期の教育の中心となって交流や連携をになうのが生活科である。「生活科の誕生は、幼児期の遊びを中心とした総合活動と教科による分化した学習活動を接続する役割を果たす。」（和田ら、2013）であり、設置する時から幼児教育と学校教育を接続する役割が期待されている。また、生活科は「教科の性格上、国語、音楽、図画工作などの他教科等との合科的・関連的な指導を行う」ことが期待されており、小学校学習指導要領生活科の解説では、小学校直後の児童の学校生活への適應を進めるために「スタートカリキュラムを編成し、生活科を中心とした合科的な指導を積極的に行うことが示された。」（文部科学省、2010）とされ、生活科を中心に他の教科を合わせて実施されている。

幼児教育と生活科教育はつながりがあることは以前より言われているが、幼児教育と生活科教育を具体的にどのようにつなぐかは未だに明瞭でない。具体的な接続のカリキュラムが作られるようになったのは最近であり、その代表的なカリキュラムが本研究で取り上げるものである。

本論文では、先駆的な品川区、横浜市、北区の

カリキュラムが、その点についてどのように試みられているかを整理する。これらの自治体では、幼保小の交流や接続を見通した取り組みが、全ての園・学校を対象として接続期の教育課程を作成し、実施している。これは、連携の過程の中で、「授業、行事、研究会などの交流が充実し、接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている。」であるステップ3に該当する。さらに、小学校、あるいは、幼稚園や保育所の一方ではなく、双方で取り組んで、教育課程を作成していることから、これからの幼児教育・小学校教育の1つの方向性を示すと考えられる。

本研究の目的は、以下の3点である。

- (1) アプローチカリキュラムからスタートカリキュラム、及び、低学年の教育（生活科1、2年生）までのつながりを明らかにする。
- (2) 生活科のスタートカリキュラムと交流活動の事例から、幼保小の接続期全体の中での生活科の役割を明らかにする。
- (3) 生活科と幼児教育の指導方法の違いを明らかにする。

2. 方法

2013年までに発行された行政報告書から、上述した理由により、次の3つを取り上げて検討する。

- ① 品川区教育委員会・品川区子ども未来事業部 「～保幼小ジョイント期カリキュラム～しっかり学ぶしながわっこ」平成22年10月
- ② 横浜市子ども青少年局・横浜市教育委員会 「～横浜版 接続期カリキュラム～ 育ちと学びをつなぐ」平成24年3月
- ③ 東京都北区教育委員会 「☆きらきら0年生 応援プロジェクト <北区>保幼小交流プログラム 保幼小接続期カリキュラム～接続期の教育の充実を目指して～」平成25年3月

3. 結果と考察

- (1) アプローチカリキュラムとスタートカリ

キュラムの特徴

品川区、横浜市、北区の接続期の教育課程（アプローチカリキュラム・スタートカリキュラム）の概要を表1に示す。

接続期は、3つの自治体とも、年長児（5歳児）秋（10月）頃から、1年生の1学期（7月）頃までであるにとらえていた。これはアプローチカリキュラム・スタートカリキュラムが作られる時期であり、他の取り組みにおいても期間はほぼ同じである。

幼稚園・保育園では、接続期においてもそれまでと同様に子どもの様子を見ながら5領域の総合的な保育活動を行うという内容や形式は基本的に変わらず、5歳10月頃から卒園までを就学前の接続期としてアプローチカリキュラムを作成しているのもほぼ同じであった。アプローチカリキュラムは、幼児教育の中で学びの芽生えを経験しながら、小学校入学後に学校での学習や生活になるべく早く適応できることが目的である。そのため、小学校生活を始めるまでに身につけておきたい自立や社会性に関する事柄が中心となる。

一方、スタートカリキュラムは、「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」を身につけ、学校生活に馴染んでいながら適応することが目的である。このスタートカリキュラムの期間区分には3つの自治体で違いが見られた。品川区は、4月は1週目、2週目、3週目、5月、6・7月と細かく分けられている。しかし横浜市は、4月1週目、4月2週目～4月末頃、5月～7月頃の3つに区分されている。北区は4月に入学してから一学期終了の7月までを1つのまとまりとしている。

これは、自治体が接続期の教育の中で「育てたい」と考えるものが異なるためであることを示している。教育課程の具体的な目標や目指す子どもの姿も異なっていた（表1）。

品川区では、5歳10月から「ジョイント期」として、「生活する力」「かかわる力」「学ぶ力」の3つの力、10項目を育てたいとしている。接続期に育てるものは保育室・教室環境、生活時程

表1 接続期カリキュラム

	品川区	横浜市	北区
接続期	5歳10月～1年生7月	5歳後半～1年生夏休み	5歳10月～1年生7月
スタートカリキュラム	4月1週目／4月2週目／4月3週目／5月／6・7月	4月1週目(最初の5日間くらい)／4月2週目～4月末ごろまで／5月頃～7月頃	1年生4月～7月
育てる力	I 生活する力 ①保育室・教室環境 ②一日の生活時程 ③身の回りの始末(靴・衣服の着脱, 所持品管理) ④食事・排泄 II かかわる力 ⑤規範意識(してよいこと・悪いことがわかる, 生命の尊重, あいさつをする, きまりを大切に, 守る, 安全に生活するなど) ⑥聞く・話す・伝え合う ⑦友達との関係づくり(共同的な経験) ⑧学級の一員としての担任との関係 III 学ぶ力 ⑨学びの芽生え ⑩運動・表現(図工・生活科・各教科)	1. 主体性: 主体的に取り組む態度 2. 志向性: 思考力, 判断力, 基本的な知識 3. かかわる力: 協同的学び	I 生活する力 (1) 基本的な生活習慣 (2) 生活の見通し (3) 食育 (4) 運動 II かかわる力 (5) 共同 (6) 信頼 (7) 規範 III 学ぶ力 (8) 思考 (9) 言葉 (10) 創造
スタートカリキュラムのねらい, 目標	・保育園・幼稚園での活動内容や経験している事柄について理解し, それらを生かして, 入学当初の指導内容を組み立てる。	・一人ひとりの子どもが安心感を持てるようにすること。 ・各教科等の学習に円滑に接続をし, 学習に意欲的に取り組めるようにすること。 ・学習や生活の基盤となる学級集団作り。	・戸惑いや不要な緊張をさせないように, 幼児期の生活や経験からの学びを生かして楽しさや喜びを味わわせ, 次第に学校生活や学習に適応させる。
アプローチカリキュラムのねらい	・小学校入学後の活動等を見据え, 3つの力をバランスよく育てる。	・生涯にわたる「学びの基礎力の育成」を図る。 ・学びの基礎力を育成するための3つの自立→「学びの自立」「生活上の自立」「精神的な自立」	・幼児が小学校生活や教科を中心とする学習に滑らかに適応する基礎となる心情・意欲・態度を培う。

から「してよいこと・悪いことがわかる」「安全に生活する」まで, 具体的な項目が取り上げられている。特に4月は週ごとに目標や経験内容が細かく書かれ, 手厚くなっている。

北区は, 品川区と同様に3つの力の養成を目指しているが, 接続期カリキュラムの中で育む3つの力は, 小・中学校につながる力としてとらえられている。「学ぶ力」は「確かな学力」へ, 「生活する力」は「健やかな体」へ, 「かかわる力」は「豊かな人間性」へと, 接続期に育てた力は, そこで完了するのではなく, 小・中学校で育む力へつながっていくように項目が作成されている。下位項

目は, 「基本的な生活習慣」「共同」「信頼」「規範」など, 小中学校の生活も見通した共通性を持つ内容である。

横浜市は, 小学校での学びの基本を幼児期における学びの基礎力を基盤とした「学力を養う」ことであるととらえている。「主体的に学習に取り組む態度」「課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力等」「基礎的な知識・技能」という学力の3つの要素につながるように, 「主体性」「志向性」「かかわる力」の3つを接続期に育てるとしている。幼児期に学びの芽生えとして培ってきたこの3つに基づいて意識的な学びへと発展さ

せ、教科を中心とした学習へと展開する。保育者や教師は、子どもの姿を引き出したり、支援したりするようなかかわり方をすることが求められ、そのかかわりによって子どもは「自己肯定感」を持つことができると書かれている。

このように自治体によって大事にしている事や育てたい子どもの姿には違いがあり、表現が異なった。しかし、接続期カリキュラムは、保育園・幼稚園においては「小学校へつなげる保育・教育活動」を念頭に置いたものであり、小学校においては「保育園・幼稚園での経験をいかした指導の工夫」である。

その中では、単に幼児期に就学準備として実施されるものがアプローチカリキュラムではなく、生涯にわたる「学びの基礎力の育成」を図ることがねらいである。例えば、横浜市は、集団の一員としての自覚（「共同的な遊びや体験の充実」）、学びの芽（「学びの芽を大切に活動の充実」）、就学への期待と安心感（「就学への期待を持つ活動の充実」）を活動の柱としている。保育者は、アプローチカリキュラムを通して、小学校入学後の様子を理解して見通しを持った指導をすることが求められる。

さらに、小学校は教育の始まりではないととらえられる。幼稚園や保育園の中で幼児が環境に主体的に働きかけ、その体験から培ってきた学びを尊重し、その上で、教科における授業を通じた学習にスムーズに移行するために作成された計画がスタートカリキュラムである。

横浜市では、スタートカリキュラムを「入学したばかりの1年生が『明日も学校に来たいな』と意欲がかき立てられるようなカリキュラムを工夫し、学校生活に対する安心感と意欲をもてるようにすることと、幼児期の教育から各教科等の学習への円滑な接続を目指す」としている。「安心して自分を発揮できる」「新しい学級や学校のルールを受け入れ、みんなと楽しく過ごせる」「学習への興味・関心をもち、意欲的に学習に取り組む」という目標は、幼児の心情・意欲・態度を育てて

きた幼児教育の成果を受け止めて学校教育を始める姿勢を示している。さらに、小学校での教科教育につなげる目的と方法が、子ども自身にも教師にも明示されている。

アプローチカリキュラムとスタートカリキュラムは、幼児教育から学校教育へ移行するためのスキルや能力が獲得することができるように、子どもの発達現状や興味・関心に沿った形式や方法で作成されていると推測される。

(2) スタートカリキュラムにおける生活科の内容

前述したように、生活科は小学校の教科の中で最も幼児教育に近い特徴を持っている。特に接続期であるスタートカリキュラムは、就学前に経験した内容や方法の影響を受けて単元が構成され、授業が展開される。幼児教育が経験カリキュラムであるのに対して、小学校は教科カリキュラムであるが、生活科はその中間に位置するものだととらえることができる。

<事例1>

「がっこうだいすき なかよしいっぱい」

(横浜市) 4月～5月

- 生活科単元目標：学校の施設の様子及び先生など、学校生活を支えている人や友達のことが分かり、楽しく安心して遊びや生活などができるようにする。
- 活動のきっかけ：
 - ・見て見て、校庭で花びらを集めたよ。風が吹くと、いっぱい落ちてきてきれいなんだ。
 - ・子どものつぶやきから活動のきっかけを見つけ、子どもの生活に即した学びをつくりましょう。入学したばかりのこの時期は、幼児教育の方法を取り入れながら、徐々に小学校の学びのスタイルに移行していくことが望ましいと考えます。
- 活動の流れ：子どもの思いや願いを生かし、意識の流れを大切にして、主体的・自発的な活動を構成しましょう。(以下、略)

○教師のかかわり：子どもの思いや願いを生かした単元を構成し、生活科を中核に他教科等と合科的・関連的に指導しましょう。

○ポイント：

ポイント1「子どもの自発性を大切に」

ポイント2「教科等学習へのつながりを見通す」

ポイント3「合科的・関連的指導により興味・関心を高める」

ポイント4「思いや願いを生かした学びを構成する」

〈事例1〉の単元は、生活科と国語の合科的内容である。児童のつぶやきを取り上げて、単元を構成し、感じたことを言語化して表現することも1つの目標である。

生活科での内容は、児童の具体的・直接的な体験を教師が受け止めて、学びへと発展させている。幼児教育の無意識な学びのスタイルの活動から教科中心の学校システムへの移行を念頭において、「教師のかかわり」や「ポイント」が詳細に書かれている。児童自身が体験を通して感じたり味わったことを他者と共有したり、他のものとなげ、直接的な経験を広げたり深めたりしている。

また、品川区のカリキュラムでは、4月～5月に学校探検を毎週実施して、短時間だが長期間をかけて徐々に学校に慣れていく。情報を一度に与えるのではなく児童のペースに合わせて、生活科を中心とした合科的指導を実施している。これはスタートカリキュラムが教科内容や授業時間を柔軟にとらえて工夫することが求められているからである。

指導案には、「発達の姿」(品川区)、「活動のきっかけ」(横浜市)、「児童の実態と学習の流れ」(北区)の項目が設けられている。特に、北区は児童の実態とねらいとの関連に焦点化して書くようになっており、児童の実態や課題を踏まえたボトムアップの課題が設定しやすくなっている。

スタートカリキュラムでは、〈事例1〉のように児童自身の気づきや感じたことを教師がくみ

取ったり、児童に発表させたりする機会があり、幼児教育の中で培ってきた表現する力を友達との活動に生かし積極的に取り組む試みがなされている。さらに、直接体験したことについてだけでなく、「知りたいことややってみたいことなどについて発表し合う」と発展させている。これは、学校へ適応することだけにとどまらず、この活動での学びが他の教科の学びにつなげようとしていることを示している。

(3) 交流活動からの学び

生活科の具体的事項の1つとして、児童と幼児と一緒に学習活動を行う交流活動がある。これは、児童が自らの成長を実感することが主な目的である。

〈事例2〉では、幼児が「小学生が作ったおもちゃと一緒に遊ぶ」、児童が「幼児が楽しむことができるように工夫する」という活動で、実施の流れも幼児・児童が別々に書かれている。

幼児は、「1年生に教えてもらいながらルールや順番を守って仲良く遊ぶ」「遊びの中で楽しかったことを発表する」「感謝の気持ちを伝える」など、自分自身で活動することが交流活動で実施することがねらいである。一方、児童は、「遊び方やルールを幼児に説明しながら、グループごとに遊ぶ」「遊びの中で楽しかったことを幼児に伝える」「グループの幼児と一緒にトイレや水飲み場に行ったり遊んだりする」である。幼児の状態に注意を払い、幼児の行動や興味関心に沿って行う活動である。さらに、活動内容だけでなく、1つの活動に取り組むときに、幼児・児童各々が実践するねらいを立て、事前の指導、事後の指導もそれぞれ作られている。

内容が別々になっているのは、理解することやできることが異なるために到達レベルが異なるからだけではない。幼児は新しい環境で行動することが目標であるのに対して、小学校児童は、自分

<事例2>

保育園・幼稚園：『子ども祭りで楽しく遊ぼう』（品川区）

小学校（生活科）：『作ったおもちゃで幼児と一緒に楽しく遊ぼう』

活動の概要	保育園・幼稚園の幼児	小学校児童
活動のねらい	1年生が生活科で作ったおもちゃで遊ぶ「子ども祭り」を楽しみ、小学校の児童や先生、教室に親しむ。	生活科で幼児と遊ぶおもちゃを工夫して作り、その面白さに気付くとともに、幼児に遊び方を教えてあげることで自分の成長を感じる。
留意点	「つくってあそぼう」の単元で、おもちゃを工夫して作る際には安全面への配慮を十分に作る。	
事前の指導	「どんなおもちゃがあるのかな」「1年生のお兄さんお姉さんと一緒に遊ぶとたのしいだろうな」など小学校を訪問することへの興味関心がもてるような投げかけをする。	幼児と一緒に楽しむことを考えて、おもちゃを工夫して作ったり、遊ぶ時のルールを工夫することを確認する。絵で表すなど幼児にわかりやすい招待状を工夫する。
実施の流れ	(略)	
事後の指導	楽しかったことやうれしかったことなどを振り返り『また小学校へ行きたい』という期待感ももてるようにする。自分たちも作ってみたい、という気持ちを高める。	幼児を案内し、楽しませた感想を発表しあうとともに、4月には1年生として入学してくることを伝え、2年生になる自覚を高める。次回の交流への期待をもたせる。

のやりたいことを行うのではなく、相手(幼児)の興味関心をくみ取って行動することが目標とされている。

両者ともそれぞれの子どもの能力を高めることができるような互恵的な活動である。

また、指導も異なる。幼稚園や保育園では、幼児の活動を保育者が見守り支えることが、幼児教育における指導である。幼児の表情に表れる気持ちを察して対応することが大事であり、工夫することができるように環境を構成することが保育者の指導の中心となる。

一方、生活科教育は、児童の体験から得た気づきを大切にしながら、それだけにとどまらず、その気づきを広がったり深めたりするように、教師が働きかけて合科的な指導をして他教科とつながるような工夫をする。

<事例2>は、児童が幼児の気持ちを読み取りながら適切な対応をするようにカリキュラムが作成されている。交流する前から、児童は、幼児が遊ぶことをイメージし、おもちゃを作成したりルールを考えたりするなど、幼児を意識した事前準備をする。これは、教師が児童の活動を見守るだけでは十分に達成することができないため、教師は児童が適切なイメージを持つことができるように、そのイメージを実現できるように教材を準備

したり環境設定をする。

このように、生活科は体験することを中心としているが、単に体験するだけではない。活動の見通しやイメージを持ちながら体験し、活動終了後に自己評価ができるような指導をしている。交流活動は、異なる年齢の子ども同士と一緒に活動することを通して、幼児期と児童期の違いを認識し、お互いに自分自身の今の姿を認識するとともに、これまでをふり返ったりこの先の見通しを持つことにより、自分の成長・発達がつながっていることを感じる互恵的な学びである。

4. 総合的考察

(1) 幼児教育から小学校生活科へのつながり
 幼児教育から小学校教育へと移行する接続期を、品川区では「ジョイント期」と名付け、「のりしろ部分」と表現している。幼児期の教育を単なる小学校への準備期間としてとらえるのではないし、一年生のレベルを落として合わせるのではなく、子どもの発達段階や指導内容・方法をきちんと理解したうえで、円滑な接続のためにすべき指導を確実に行う。「のりしろ部分」は他の部分に比べて厚くなっていることから、幼児教育と小学校教育が異なる性格を有していることを、保育者と教師が十分に理解する必要がある。

本研究で取り上げた3つの自治体では、この両者の違いを明示化した上で、「つながり」を意識された教育課程が作られている。

事例にもあるように、幼児はまず自分の興味や関心を対象とした後、徐々に周囲に存在する友達や教師などがあることを意識するようになり、気づいていく。その上で、気づいたことを表現しようと試行錯誤し、状況や条件に合わせて何度も挑戦する姿が見られる。

それに対して、小学校児童は、すでに自分の状態や気持ちに関しては十分自覚し理解しており、自分の興味関心や思いを乗り越えて、相手（交流活動においては、幼児）の活動や思いを読み取って意識して活動する。そこでは、常に他者が存在していることが意識されており、他者とコミュニケーションを取り、目的に応じて必要な情報を聴いたり伝えたりする。気づきの有無だけでなく、広がりや深まりという気づきの質が問題となる。

また幼保小の交流活動では、幼児の就学に向けての期待を受け止め、小学校に入学することがより楽しみになるようにカリキュラムを作成している。児童は、自分の育ってきた過程を振り返り、他者に理解できるように説明したり、他者の興味関心に沿った形で学んだりできるような授業が展開される。1つの活動であるが、それぞれのねらい・目標は異なる互恵的な活動である。子どもは時系列的な見通しを持ち、発達過程やそのつながりを具体的な経験を通して意識することができる。

(2) 接続期における生活科の役割

小学校生活科は、小学校低学年の教科の1つである。しかし、他の教科とは異なり、経験カリキュラムの性格を持つ。児童の主體的で具体的な活動からの気づきを受け止め、児童一人ひとりの多様性を認めて生かすものである。その一方、教科カリキュラムの特徴も合わせ持ち、気づきを深めて、他の教科や、高学年や中学校以降の教科学習につながるような論理的、科学的な見方、考え

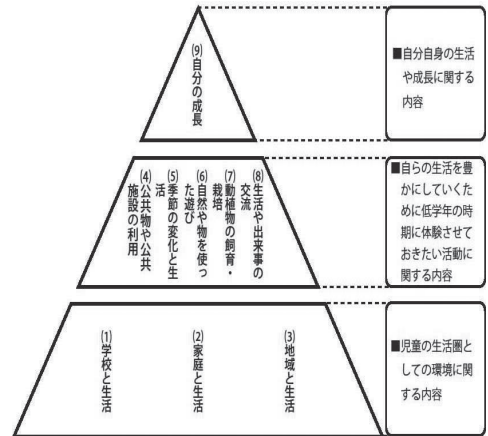


図1 生活科の内容の階層 (小学校学習指導要領解説生活編 P.22)

方の基礎を養う役割も果たす側面もある。

生活科の内容は、図1に示すように3つの階層を持っている(文部科学省, 2008)。第1の階層は、「学校と生活」「家庭と生活」「地域と生活」があり、身近な生活圏としての環境に関する内容である。第2の階層は、「公共物や公共施設の利用」「季節の変化と生活」「自然や物を使った遊び」「動植物の飼育・栽培」「生活や出来事との交流」であり、自分の生活を豊かにしていくために低学年で体験させておきたい活動に関する内容である。

そして第3の階層は、自分自身の生活や成長に関する内容「自分の成長」である。第1階層、第2階層の内容と関連させてとらえることができる。また、児童が自身の成長を振り返り、自分が大きくなったことや自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどを理解する。

入学当初、期待とともに不安や戸惑いを持っている児童は、スタートカリキュラムの中で実際に体験して、学校の施設とその使い方、生活上の決まりやルールを知って、徐々に学校に慣れていく。この学校に慣れていく過程は、第1階層の「学校と生活」、第2階層の「公共物や公共施設の利用」の内容である。児童が「自分自身の生活や成長」を実感できる大切な機会は、第3階層の「自分の成長」である。スタートカリキュラムは、生活科の特徴を反映した内容であり、接続期における教育の中心的な役割を担っている。

(3) 生活科における指導方法

これまで述べてきたように、幼児教育と生活科は、子どもの体験や感じたことをきっかけとした活動であるが、目指す目標は異なっている。生活科では、身近な環境や他者とかかわる体験を通して、自分の世界を広げ、深めていくことが目標となる。この目標を達成するため、教師は児童の体験していることやそこからの気づきを敏感にキャッチし、児童自身が気づきを深めることができるような働きかけをすることが必要となる。〈事例1〉にあるように、一方的に教えるのではなく相互的なやりとりをし、児童の気づきを対象へ主体的に働きかけるように高める。

児童は一人ひとりの生育歴や発達、性格、興味・関心などが異なるため、それぞれの気づきが生まれる。その中で考えたり工夫したりする経験をとおして、児童は学びを自ら作り上げられるようになり、自己肯定感を持つことができるようになっていく。生活科は、教師が児童一人ひとりに寄り添うことが可能な教科であるため、幼児教育の中で育てられてきた児童の気づきをしっかりと受け止めることができる。その上で、さらにその気づきを科学的な思考や論理的に考える力へと育て、学びの基礎となるような指導を行うことが必要である。

5. まとめ

本研究の結果から、以下の3点が見いだされた。①就学への期待を持ちつつ主体的に活動する幼児期のカリキュラムから、その成果を受け止め教科教育へと移行できるようなカリキュラムが作成されていた。②交流活動をはじめとする生活科の活動によって、子どもの成長や発達が幼児期から児童期へとつながり、さらにその先へとつながるという見通しを持つことができた。③幼児教育では子ども一人一人の姿を大切にす指導が行われているのに対して、生活科では学校教育のシステムや目標を理解し、行動できるような教師のか

かわりがみられた。また、生活科を中心とした接続期カリキュラムは、幼児教育での学びを發展させて深めるように指導していた。

しかしながら、本研究は報告書の検討であるため、実際の保育・教育現場での取り組みの実態と同じとは限らない。接続期の教育を実践する中で、子どもの実態に合わせて問題点や精緻化できる点を検討することが課題である。さらに幼児教育と生活科を中心とした小学校教育のつながりを明確にして、さらに質の高い教育を実践することが求められる。

文献

- ・文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説 生活編 日本文教出版
- ・文部科学省 2008 幼稚園教育要領解説 フレーベル館
- ・文部科学省 2010 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/11/22/1298955_1_1.pdf
- ・酒井朗・横井紘子 2011 保幼小連携の原理と実践 ミネルヴァ書房
- ・品川区教育委員会・品川区子ども未来事業部 2010 「～保幼小ジョイント期カリキュラム～ しっかり学ぶしながわっこ」
- ・東京都北区教育委員会 2013 「☆きらきら0年生応援プロジェクト <北区>保幼小交流プログラム 保幼小接続期カリキュラム—接続期の教育の充実を目指して—」
- ・横浜市こども青少年局・横浜市教育委員会 2012 「～横浜版 接続期カリキュラム～ 育ちと学びをつなぐ」
- ・和田信行・清水一豊・茂木三枝 2013 「幼児教育と生活科の連携」 せいかつか&そうごう 第20号 52-59